View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

介護過程の展開における「情報の関連図」の教育的効果に関する研究　その２

―「情報の関連図」を活用しなかった介護実習と活用した介護実習の比較から―

杉山　せつ子　中村　京子

聖隷クリストファー大学

The Educational Effect of Information Association Maps(IAM) Part2: Comparing Care Work Practice with IAM Application to One Without

Setsuko SUGIYAMA　Kyoko NAKAMURA

Seirei Christopher University

抄録

前回（杉山 2014）は主に介護実習の事後指導としての介護過程の展開における「情報の関連図」の効果測定だった。今回は、聞き取り調査の結果を集約し、情報の関連図を活用しなかった「介護実習Ⅱ」と活用した「介護実習Ⅲ」の比較や「介護実習Ⅲ」の事後指導としての活用から「情報の関連図」の有効性を考察した。

本研究では、「情報の関連図」が利用者の全体像を捉えるのに有効であることを明らかにすることを目的に、4 年制大学の介護系学生６名を対象に、インタビューガイドを使用した聞き取り調査を行った。結果、「介護実習Ⅲ」で情報の関連図を活用した２名の学生は、受け持ち利用者の全体像を捉えた介護展開を体験し、両者の主体的な学びの満足度は高かった。６名全員が、「情報の関連図」を描くことに肯定的であった。また、今後の介護福祉教育における介護過程の教育に役立つ 12 項目が示唆された。

キーワード：情報の関連図、介護過程、介護福祉、全体像の把握

Key words：Information Association Map, Care Work Process, Care Work, Grasp of the Perspective

Ⅰ．はじめに

日本は、超高齢社会を迎え介護が大きな社会問題になっている。「認定介護福祉士」（仮称）創設と介護福祉士養成教育の今後」の論文において、太田[1]は、「2012年介護保険制度の見直しで『地域包括システム』の構築が盛り込まれた。それには、さまざまな関係機関と専門職の力、地域住民の力、行政の力が必要である。しかし、介護福祉士の厚い層が地域になければ、結局は“地域包括システムは絵にかいた餅となる”と言ってもよい」と述べている。

チームアプローチが益々重視されるなか、介護福祉士の独自性や専門性の構築の研究が進められている。とりわけ介護福祉士の専門性の確立で、重視されているのが2007年12月「社会福祉士及び介護福祉士法」の法改正があり、介護福祉士養成カリキュラムに、新しい科目として150時間おかれた「介護過程」の教育方法の研究である。介護過程の展開における関連図の活用の研究もその一つである。

先行研究

介護過程のテキストにおいては、佐藤[2]がアセスメントの情報の解釈・関連づけを考え、課題を抽出す方法として関連図を紹介している。

横尾[3]が平成21（2009）年、文部科学省における大学教育プログラムとして採択されたテーマ「生活関連図による地域活動体験と授業の統合」の教材の中心となる生活関連図学習の方法を授業科目「介護過程」の中で取り組んできている。

さらに横尾[4]は、二次調査として、生活関連図によるアセスメントの評価―生活関連図作成と統合化の理解度―の調査研究を行っている。その結果、「生活関連図作成とアセスメントの表への記入までの評価では、生活関連図の作成は容易にできるが、諸問題の関連性を統合し、分類、整理することや説明として書き表すことが困難であった」と記述していた。

横尾[5]は、二次調査で明らかになった学生の学びを統合化し、活用していく課題を踏まえて、生活関連図を用いた介護過程展開の試験評価結果と介護実習後の自己評価結果を比較し、今後の生活関連図学習方法の課題を把握することを目的に調査を行っている。その結果、介護過程における生活関連図学習の今後の課題は、①生活関連図によるアセスメント内容を介護計画に反映させること、②専門知識を活用した具体的な援助方法が立案できること、③介護現場でコミュニケーションスキルを活用し、介護計画に基づいた介護行為および評価ができる教育方法の工夫が必要と述べていた。

伊藤[6]は、介護過程の授業においてアセスメント能力を身につけることを重視し、対象理解を深めることを目的に関連図の作成を授業に盛り込でいる。研究では、今後の授業展開を模索する示唆を得る目的で2年生23名を対象に関連図の作成についてアンケート調査を行っている。その結果を基に「関連図の記入方法の理解が、それを用いた利用者理解の方法としての有効性にも繋がっていることが示唆された」と記述していた。

３者とも関連図の表示方法に用語や記号の定義を行っていた。先行研究の課題を踏まえ、関連図の表示法に用語や記号を定義する方法では利用者の全体像を捉えるのは困難との問題意識から、筆者が考案した関連図の表示方法に用語や記号の定義を行わない介護過程の展開における「情報の関連図」の実践研究をすることとした。

前回の介護過程の展開における「情報の関連図」の研究[7]では、聞き取り調査の結果を集約し、「情報の関連図」を活用前と後の利用者の全体像の把握の比較から「情報の関連図」の有効性を考察した。主に実習の事後指導としての介護過程の展開における「情報の関連図」の活用の効果測定だった。今回は情報の関連図を活用していない「介護実習Ⅱ」と活用した「介護実習Ⅲ」の比較による介護過程における「情報の関連図」の効果測定である。

本研究では、介護過程の展開における「情報の関連図」が利用者の全体像を捉えるのに有効であることを明らかにすることを目的とした。

用語の説明

介護過程における「情報の関連図」：介護過程の展開における「情報の関連図」とは、「生活の関連図」と異なり、利用者の全体像を捉えることを目的としたツールである。情報の関連図の特徴は、関連図の表示方法に用語や記号の定義は行わず、A4用紙の中央に利用者を書き、自由に情報を線でつないでいく。その線で結んだ部分を口頭で説明し、文章化していくものである。したがって、図を描く基本ツールである。△、□、直線（曲線）」の組み合わせや色分け、区分などは自由である。

（図１）は、実際に書かれた「情報の関連図」の一例である。

〔情報の関連図の活用手順〕

介護に必要な情報収集

→　情報の関連図を描く

→　情報の関連図から不足している知識や情報を見つける

→　不足した知識を調べる

→　情報の関連図の不足情報を補う

→　情報の関連図の発表→情報と情報の関係性を考え、情報の関連図の分析・課題部分をマークする

→　指定用紙のマーク部分（情報のかたまり）の文章化

＊文章化のポイントとして、「なぜ、どうして、だから」の視点で情報・知識の補充をする。

介護過程：介護過程とは、一般に「介護の目的を達成するために行う専門知識を活用した客観的で科学的な思考過程」[8]をいう。介護過程の展開は、専門的知識や技術を統合し、「アセスメント→計画の立案→実施→評価」[9]の順に系統的な方法で行う。

生活の関連図：生活関連図とは、看護領域において患者の健康障害を理解し、看護の方向性を見出すために記述する病態関連図を基盤にし、介護の利用者の状況や生活環境、介護に必要な問題点についてその概念をキーワードで表示し、相互関連性を線分で繋いだ図である。この図によって学生の体験内容が介護福祉の諸問題とどのような関係があり、今後学生は課題解決のために何を学ぶべきか明示されるようになっている。また、利用者をとりまく具体的な問題と全体像を把握できるのが特徴である。図に表す言葉は①事例、②要因、③顕在問題、④潜在問題、⑤もてる力、⑥可能性、⑦介入要素を使っている。[10]

介護実習Ⅰ・Ⅱ：本学の介護実習は、養成施設指定規則第５条第Ⅰ項第十四号ロの実習（以下介護実習Ⅱという）の前半が「介護実習Ⅱ」、後半が「介護実習Ⅲ」になる。

「介護実習Ⅱ」は、一つの施設において一人受け持ち利用者を決め、一定期間以上継続して実習を行う中で、他科目で学習した知識や技術を統合して、介護過程の基礎となる個別介護計画の立案・実施のプロセスを学ぶことを目的と

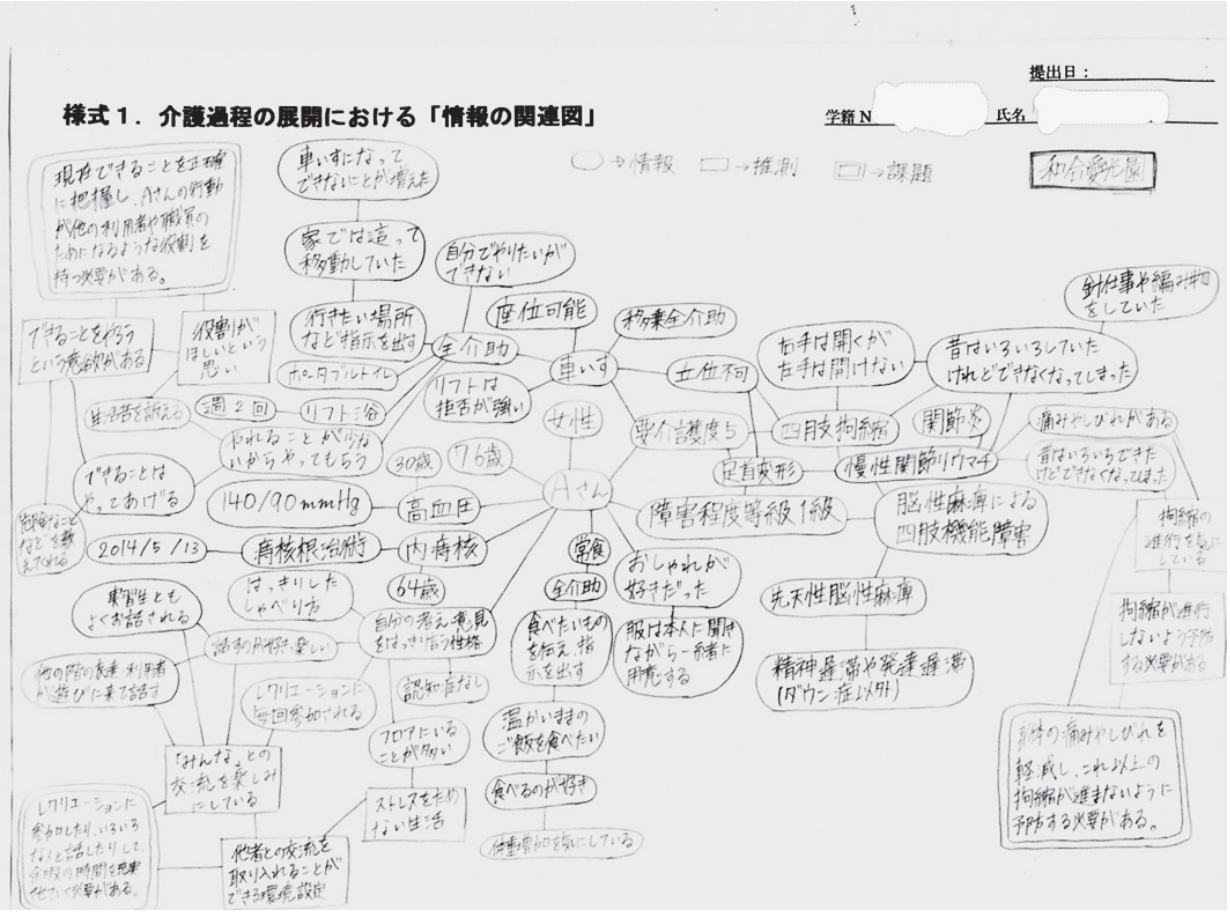

図１　情報の関連図

している。

「介護実習Ⅲ」は、施設の運営のプログラムに参加し、サービス全般について理解すると同時に、受け持ち利用者の個別ケアを行うために、他科目で学習した知識や技術を統合して、介護過程を展開し、具体的な介護サービスの提供の基本となる実践力を習得することを目的としている。

Ⅱ．研究方法

１．調査対象と聞き取り内容・方法

１）調査対象

調査対象は本調査実施前に「介護過程展開法Ⅰ・Ⅱ」で「情報の関連図」を活用した授業を受講し、「介護実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」が終了し、聞き取り調査協力に同意を得た４年制大学介護系学生６名である。

本学の介護過程の授業及び介護過程の展開様式は、ICF に基づいた介護過程のテキスト『介護過程』を使用している[11)]。なお、本学科の介護実習Ⅱ・Ⅲの介護実習記録は、テキストの介護過程の展開様式にアセスメント表（１）日常生活の状況（本人からの情報◎、観察から得た情報△、家族・関係者・記録からの情報■）の種わけ記号と様式（ 短期目標、具体的な実施計画、実施状況、評価）が追加された記録様式６種類を使用している。

表１　「情報の関連図」利用者の全体像把握の評価基準

評価項目	優	良	可	不可
（1）自分でまとめることで利用者理解	4	3	2	1
（2）情報の関連の理解	4	3	2	1
（3）利用者が介護を必要とすることになった主な疾患・障がいの理解	4	3	2	1
（4）主な疾患・障がいと ADL（日常生活動作）との関連の理解	4	3	2	1
（5）利用者の思いの理解	4	3	2	1
（6）どうような人が利用者にどのように関わっているのかの理解	4	3	2	1
（7）生活歴が今の利用者の状況に関係していることの理解	4	3	2	1
（8）介護の必要（課題）と介護内容まで予測	4	3	2	1
（9）頭で考えるだけではわからないことの理解	4	3	2	1
(10) 線で結んだ情報の関連性について文章化することで、アセスメントの理解	4	3	2	1

A：32 以上　B：31~28　C：27~24　D：23 以下　（筆者作成）

2）聞き取り調査項目

（1）あなた御自身についてお聞きします。
（2）自分でまとめることで利用者の理解を深めることができましたか。
（3）情報の関連の理解を深めることができましたか。
（4）利用者が介護を必要とすることになった主な疾患・障がいについて理解できましたか。
（5）主な疾患･障がいと ADL（日常生活動作）との関連が理解できましたか。
（6）利用者の思いが理解できましたか。
（7）どのような人が利用者にどのように関わっているか理解できましたか。
（8）生活歴が今の利用者の状況に関係していることの理解ができましたか。
（9）介護の必要（課題）と介護内容まで予測できましたか。
(10) 頭で考えるだけではわからないことが理解できましたか。
(11) 線で結んだ情報の関連性について文章化することで、アセスメントの理解を深めることができましたか。
(12) その他、お気づきの点がございましたら自由にお話しください。

なお、インタビューガイドには、質問項目（1）～（10）の４段階評価（①出来ている、②おおむねできている③ほとんど出来ていない④出来ていない）と、その理由、その他自由記述をあらかじめ記入してもらい、聞き取り調査を行った。

このインタビューガイドは、利用者の全体像把握の自己評価基準（表１）でもある。

3）データ収集および分析方法

① 2014 年８月 18 日(月)～９月 19 日(金)に「介護実習Ⅱ」を実施した。
②調査実施前の 2014 年 10 月１日～ 2015 年１月 21 日「介護過程展開法Ⅰ」の授業前半５回で「情報の関連図」について講義・演習を行った。
③ 2015 年２月９日（月）～３月 20 日（金）「介護実習Ⅲ」の介護過程の展開で「情報の関連図」を描くことは任意で依頼した。なお、介護実習Ⅲで書かれた介護過程の展開における

「情報の関連図」は、本研究では活用しない。

④学生へ研究協力の依頼時期は秋セメスターの成績が出た後の、4月中旬に、筆者の担当科目の授業の終わりに依頼した。

⑤聞き取り調査協力の同意が得られた介護系学生を対象に、5月から順次、日時を調整しながら10月末までインタビューガイドを使用し、聞き取り調査を行った。聞き取り調査は、ICレコーダーとインタビューガイド（資料1）を使用する。インタビュー所要時間は、30分程度（60分以内）であった。

なお、本研究は、受け持ち利用者の介護過程の展開事例を対象にするものではない。

⑥聞き取り調査の結果を集約し、「情報の関連図」を活用した介護実習Ⅲと「情報の関連図」を活用しない介護実習Ⅱとの利用者の全体像の把握の比較から「情報の関連図」の有効性を考察した。

倫理的配慮

本研究は、聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認（承認番号14052）を得て実施した。調査対象者には、研究の趣旨や利益・不利益を含め文章と口頭で、説明し、協力を依頼した。また、同意後、協力を断ってもよいこと、協力したデータはプライバシーの保護に十分配慮し、匿名性が確保されることを伝えた。

研究による利益は、調査に協力することで利用者の全体像を捉えやすくなる。一人の受けもち利用者の介護過程の展開をする介護実習を振り返り、利用者の全体像を捉えた介護過程の展開だったか自己評価でき、介護過程の展開能力の向上が期待できる。

研究による不利益は、調査協力を断った場合、教員と学生という研究者との関係性や成績への影響を感じ、精神的負担の可能性がある。

今回、聞き取り調査を同意し、途中で断った介護系学生1名については、個別に関わりフォローした。

Ⅲ．聞き取り調査の結果

1．調査対象の属性

聞き取り調査の対象者は、4年制大学介護系学生の6名（表2）である。その内、介護実習Ⅲで「情報の関連図」を活用したのは、学生E・Fの2名だった。

以下では、調査協力者の発言を適宜引用する。その際、（表2）の調査対象者名（AからF）で発言者を示す。

表2　聞き取り調査の協力者一覧

調査対象者	年齢	学年	情報の関連図の活用
男性A学生	20代	3	介護実習Ⅲで情報の関連図を活用していない。
男性B学生	20代	3	介護実習Ⅲで情報の関連図を部分活用した。
女性C学生	20代	3	介護実習Ⅲで情報の関連図を活用していない。
女性D学生	20代	3	介護実習Ⅲで情報の関連図を活用していない。
女性E学生	20代	3	介護実習Ⅲで情報の関連図を活用した。
女性F学生	20代	3	介護実習Ⅲで情報の関連図を活用した。

（筆者作成）

2.「情報の関連図」を使用して、利用者の全体像の把握

インタビューガイドの質問項目（1）～（10）の4段階評価の結果である「情報の関連図」利用者の全体像把握の評価（表3）では、最も高いのが37点で学生6名全員が31～37点のB評価以上であることから利用者の全体像把握がおおむね出来ていた。

表３　「情報の関連図」利用者の全体像把握の自己評価

対象	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	計
学生Ａ	4	3	4	3	3	2	2	3	4	3	**31**
学生Ｂ	4	3	4	4	4	3	4	3	4	4	**37**
学生Ｃ	4	3	4	3	3	3	4	3	3	3	**33**
学生Ｄ	3	3	3	3	3	3	4	3	3	3	**31**
学生Ｅ	3	3	3	3	3	3	3	3	4	3	**31**
学生Ｆ	3	3	3	3	3	3	3	3	4	3	**31**

（　）の数字は「情報の関連図」利用者の全体像把握の評価項目　（筆者作成）

質問項目（１）「自分でまとめることで利用者の理解を深めることができる」と質問項目（３）「利用者が介護を必要とすることになった主な疾患・障がいについて理解」が学生Ａ･Ｂ･Ｃが４評価で「できている」であった。質問項目（７）「生活歴が今の利用者の状況に関係していることの理解」では、学生Ｂ・Ｃ・Ｄが評価４であった。質問項目（９）「頭で考えるだけではわからないことが理解」では、学生Ａ･Ｂ･Ｅ・Ｆが４評価で最も多かった。学生Ａは、質問項目（６）「どのような人が利用者にどのように関わっているか理解」と質問項目（７）「生活歴が今の利用者の状況に関係していることの理解」が２評価だった。

以下は、インタビュー項目での設問は、調査対象者から表出されたもの（表４）をまとめた。なお、「情報の関連図」活用有りの発言は（「有り」と示す）、「情報の関連図」活用無しの発言は（「無し」と示す）、

１）自分でまとめることで利用者の理解

「有り」の【E】と【F】は、介護実習Ⅲにおいて、「情報の関連図」を描き、両者とも「介護実習Ⅱ」と比較して「深い」という言葉を使用していた。【E】は、「利用者を理解すると、すごくコミュニケ―ションがうまくとれた」と、【F】は、「情報の関連図は、自分で考えるので『その人を理解しよう』という思いが人から言われるより強かった」と利用者との関係性の発言があった。

また、【E】【F】は、事後指導で「情報の関連図を描き」忘れている部分の振り返りや思い出しながら情報の整理をしていた。一方、「無し」の４名は、事後指導で「情報の関連図」を描いたことで、気づきや発見があり、利用者理解を深めていた。

「無し」の具体的な気づきや発見としては、「ニーズが見えてきて、かかわりも意図的に生まれ、利用者の強み（ストレングス）やプラスの可能性の発見もあり、利用者理解を深める」【A】、「振り返れば自己評価満足度が上がる」【B】、「もし実習中に情報の関連図を描いていれば、早い段階で情報をつなげられ、支援計画に反映できた」【C】、「情報の関連図は実習後のケーススタディに役立った」【B】、【D】、「まとめるのと自分で深める部分で学びが増えた」【D】などであった。

２）情報の関連の理解

「有り」の【E】「情報の関連図を描き、情報の関連の理解が介護実習Ⅱよりもできた」とあり、【F】は、「情報の関連図を描きはじめると考えられるだけ考え、自分の知っている情報は絞り出せた。頭の中だけだとこんがらかってく

る。描きだせば目で見えるので分かりやすい」と述べていたことから、体験として情報の関連の理解を深められていた。

「無し」の【A】は、「実習後に情報の関連図を描くまでは、情報と情報の関係の視点をもっていなかった」が実習の事後指導で情報の関連図を描いたことで情報の関連の理解を深めていた。

3）利用者が介護を必要とすることになった主な疾患・障がいの理解

「有り」の【F】は、「介護実習Ⅱでは、受け持ち利用者の病気を調べようとしなかった。情報の関連図を描いたことで主な病気を知るきっかけになった」と述べており、「病気を知ることで受け持ち利用者との接し方が変わった」と主な疾患・障がいの理解の大切さを体験していた。【E】は、「受け持ち利用者さんだと責任があるので主な疾患・障害をよく、深く知った。実習が終わったあとにも分からないことをちゃんと調べてよかった、充実していた」と受け持ち利用者への思いや、“学び”の楽しさを体験していた。

実習の事後指導で関連図を描いた4名のうち、「無し」の【A】は、「病気の関係性を図に描けるので、つながりが見える」と「情報の関連図」の効果を述べていたが他の【B】、【C】、【D】の3名は、主な疾患・障がいの理解の重要性を認識して介護実習Ⅲに臨んでいた。

4）主な疾患・障がいと ADL（日常生活動作）との関連の理解

「有り」の【E】、【F】は、主な疾患・障がいと ADL（日常生活動作）との関連の理解は、利用者理解を深め、受け持ち利用者の介護の必要を見出せることを体験していた。

「無し」の【A】は、実習の事後指導で「情報の関連図を描き「一部因果関係が見えてきた」とあり、【B】は、「何が支援できるか思い浮かべることができた」、【C】は「主な疾患・障がい、自分なりに見極め、ADL（日常生活動作）との関連の理解ができた」、【D】は、「こういう障がいがあるから、こういう生活動作になるということが分かった」と4名とも主な疾患・障がいと ADL（日常生活動作）の関連を理解することの重要性を認識できていた。

5）利用者の思いの理解

「有り」の【E】は、「介護実習Ⅲでは、介護計画に利用者の思いを入れないといけない」と ICF に基づいた介護過程の展開を意識していた。また、【F】は、「介護実習Ⅲの受け持ち利用者さんは、疾患のせいで体が他の人より動かしづらいが、辛い感情を他者に見せない、その気持ちが伝わってきた」と利用者の思いの理解を体験していた。

「無し」の【A】は、実習後に情報の関連図を描き、利用者理解を深めていた。【B】は、「情報の関連図」と比較して「利用者の思いの理解は、項目に沿ったアセスメントではできない」と ICF のアセスメントシートを指摘していた。【C】【D】は、言語的コミュニケーションが難しい、重症心身障がい者を受け持ち、利用者の気持ちに寄り添う援助をしていた。

6）どのような人が利用者にどのように関わっているかの理解

「有り」の【E】は、「受け持ち利用者とどのように関わっていいか分からなかったので職員、他の利用者、家族との関わりを見ていた」と着眼点がよかった。【F】は、「介護実習Ⅲの受け持ち利用者については、娘さんが面会に来られた様子を見て、利用者さんが少し明るくなった。家族ってすごいと思った」と利用者との関係性を捉えられていた。

「無し」の【A】は、「どのような人が利用者にどのように関わっているかの視点で情報を収集していなかった」と本インタビューガイドを

見て、利用者の全体像把握に必要ということを学んでした。【B】【C】【D】は、「介護実習Ⅲ」において、受け持ち利用者の人的環境の重要性を認識できていた。特に【D】は、「受け持ち利用者が快の表情を見せる職員も分かった」と関係性までも捉えていた。

７）生活歴が今の利用者の状況に関係していることの理解

「有り」の【E】は、「介護実習Ⅲの受け持ち利用者は、昔、外人と関わった経験があって、英語好きで、『これ英語でなんて言いましたっけ』と聞くと、生き生きとした反応をみせたのでかかわりのなかで英語を取り入れていこうと思った」と述べており、【F】も、「受け持ち利用者は、几帳面な方で、施設に入所してもその人の性格が表れていることを感じた」と述べ、両者とも生活歴との関連を捉えていた。

「無し」の【A】は、「生活歴が今の利用者の状況に関係していることにつては、介護実習Ⅲの振り返り、情報の関連図を描いたが、見えていなかった」と本インタビューガイドで情報の不足に気づいていた。また、【B】は、「情報の関連図は、過去と現在のつながりが見える」と「情報の関連図」を実習の事後に描いたことで生活歴が今の利用者の状況に関係していることに気づいていた。

８）介護の必要（課題）と介護内容まで予測

「有り」の【E】は、「全体像が捉えられたのでこういう介護ならいいかなと考えられ楽しかった。介護ニーズに一致した」と述べ、【F】は、「コミュニケーションを通して本当の気持ちが分かった」と両者は、介護の必要（課題）と介護内容まで予測できる体験をしていた。

「無し」の【A】は「本インタビューガイドで思考が変化した」と情報収集の幅が広がっていた。また、実習の事後指導として「情報の関連図」を描いたことで、【B】は、「情報の関連図を描いてからは、この辺でこうすればよいか、ぼんやり見えた。介護の必要（課題）をはっきりさせる一つの方法として使える」と述べていた。【C】は、「介護の必要（課題）と介護内容まで予測は、一つひとつの情報をつなげることで分かってくる」と、【D】は、「利用者の全体像が見えてくると何が必要か見えてくることを体験した。情報の関連図を描いた方が見えやすい」と【B]【C】【D】三者とも「情報の関連図」の効果を述べていた。

９）頭で考えるだけでは、わからないことの理解

「有り」の【E】は、「情報の関連図は頭で考えるだけでは分からないことが理解できる」と、【F】は、「頭の中だけだと整理しにくいことが情報の関連図を描くとすぐに分かった」と両者とも「情報の関連図」の効果を述べていた。

「無し」の【A】は、「利用者の環境、使えない資源、他理論と比較して思考が広がっていく」、【B】は、「文章化する時に情報の関連図の中に文字があるので、これを頼りにつないでいき、文章化できる」さらに、「利用者の性格や内面が見られる」、【C】は、「頭で考えるだけでは、わからないことの理解はおおむね出来た」と、【D】は、「情報の関連図を描き出してみた方が、これは何だろうと、自分の分からないことが目で見て分かり、考えが浮かんでくる」と６名とも、頭で考えるだけでは、分からない体験をしていた。

10）線で結んだ情報の関連性について文章化することで、アセスメントの理解

「有り」の【E】は、「情報の関連図は自分なりに考えていくので、縛りがなく書きやすい。情報の関連図に情報が出ているのでアセスメントしやすかった」と、【F】は、「情報の仲間のかたまりを自分でつくっているので、それを文

章化しアセスメントまとめやすかった」と「情報の関連図」の効果を述べていた。

「無し」の【A】は、「情報の関連図を見ながら気づきを加え発言できる。文章でまとめることができる。アセスメントの理解を深めていける」と、【B】【C】は、「線で結んだ情報の関連について文章化することで、アセスメントの理解ができた」と述べていた。【D】は、「情報の関連図に情報があって、そこから知識が増えて根拠があるアセスメントが言える」と線で結んだ情報の関連性について文章化することでアセスメントの理解ができていた。

11）その他、「情報の関連図」について

「有り」の【E】は、「アセスメントをする上で情報の関連図はすごく必要、情報の整理、アセスメントしやすい。介護実習Ⅲの配属先の実習指導者さんが、情報の関連図を描いたのを見てほめてくれた。介護実習Ⅲは利用者理解が早く、内容も深い、介護実習Ⅱは浅かった」と述べていた。また、【F】は、「様式「ICF に基づいたアセスメントシート」を埋める前に情報の関連図を描く、指定の A4 用紙の中央に「利用者」を描くことは決まっているので、情報がボンボン出てきたら楽しい。書きながら、そういえばあれもあったと情報の関連図を描くことで利用者の心身の状態が見えてきた」と、ICF に基づいた介護過程の展開に役立つ「情報の関連図」の効果を述べていた。

「無し」の【A】は、情報の関連図は個別スーパービジョンに活用できる。スーパービジョンにおいて実習生が主体になって、情報の関連図を基に説明し、一緒に考えていきやすい。実習指導者に学生の理解や考えていることが見える。できたら実習指導者に情報の関連図の有効性を伝える必要がある。現場の介護職が情報の関連図だけでも使える。ICF に基づいた介護過程では、ストレングスを感じていなかった。情報の関連図は、型がないので、ストレングス視点から介護過程の展開ができる。介護福祉士の個別性を引き出すモデルではないか。情報の関連図は根拠のかたまりである。情報の関連図を用いることで「なぜ」を深めていく思考が育ってきたように思う」と効用について述べていた。【B】は、「情報の関連図を描くと、意外とこれだけの情報を自分はもっていたことが分かり、ポジティブになれる」「情報の関連図は書き出したら止まらない。ICF に基づいたアセスメント表より、最初から関連図を描いて、拾う方がもしかしたら書きやすいかも知れない」と「情報の関連図を描くことで、利用者理解ができる。個別支援計画のニーズが明白になる」など述べていた。

【D】は、「はじめに情報の関連図を描ききながら、調べながらの情報収集し、指定の記録様式に転記し、整理していたら早かったと思う。実習後に情報の関連図を描いたら、介護実習中の介護計画とは違う介護計画が立案でき、こうした方がよかったと自分で気づけた」と「情報の関連図の活用法まで述べていた。

表４　介護過程の展開における「情報の関連図」を使用して、利用者の全体像の把握

質問項目	「情報の関連図」活用有りの発言	「情報の関連図」活用無しの発言
1)自分でまとめることで利用者理解	「介護実習Ⅲにおいて、情報の関連図を描き、介護計画を実施し利用者理解できた。介護実習Ⅱのときは、そこまで深くやっていない。利用者を理解すると、すごくコミュニケーションがうまくとれた。実習後、情報の関連図を描き、忘れている部分の振り返りができた」【E】 「情報の関連図を介護実習Ⅲで描いた。介護実習Ⅱと比べ介護実習Ⅲの方が、より深いアセスメントができた。情報の関連図は、絶対描かなければいけないものではないので面倒くさいと思っていたが、描きはじめたらまとめやすく、描いてよかった。実習後に情報の関連図を描き、あらためて、受け持ち利用者について思い出しながら情報を整理することができた。情報の関連図は、自分で考えるので『その人を理解しよう』という思いが人から言われるより強かった」【F】	「実習の事後指導で情報の関連図を描き、情報の関連が視覚的に捉えられ、関係性から気づき、ニーズが見えてきて、かかわりも意図的に生まれ、利用者の強み（ストレングス）やプラスの可能性の発見もあり、利用者理解を深めることができた」【A】 「実習後に情報の関連図を書いて、振り返れば自己評価・満足度上がる。ケーススタディも情報の関連図から広く捉え、利用者理解は深まっていった」【B】 「実習後に、情報の関連図を描くことで、あらためて理解、振り返ることができた。もし実習中に情報の関連図を書いていれば、早い段階で情報をつなげられ、支援計画に反映できた」【C】 「実習後、情報の関連図を書き、関係のないと思うものがつながり、こころとからだがつながっていることを実感した。情報の関連図は実習後のケーススタディに役立った。まとめるのと自分で深める部分で学びが増えた」【D】
2)情報の関連の理解	「今まで情報の関連図を重要とは思っていなかったが、情報の関連図を描き、情報の関連の理解が介護実習Ⅱよりもできた。情報の関連図は、実際の介護現場で描いてみないと分からない」【E】 「情報の関連図は描き方に縛りがないから、自分なりに描けるところがいいなと思う。情報の関連図は、描きはじめると考えられるだけ考え、自分の知っている情報は絞り出せ、目で見えるので分かりやすい」【F】	「実習後に情報の関連図を描くまでは、情報と情報の関係の視点をもっていなかった」【A】 「実習後に情報の関連図を描いたことで情報の関連の理解を深めることがおおむねできた」【B】【C】 「情報の関連の理解では、自分で調べて、本人からの思い、考えだったので自信をもって考えることができた」【D】
3)利用者が介護を必要することになった主な疾患・障がいの理解	「受け持ち利用者さんだと責任があるので主な疾患･障害をよく、深く知った。実習が終わったあとにも分からないことを調べてよかった、充実していた」【E】 「介護実習Ⅱでは、受け持ち利用者の病気を調べようとしなかった。情報の関連図を描いたことで主な病気を知るきっかけになった。病気を知ることで受け持ち利用者との接し方が変わった」【F】	「病気の関係性を図に描けるので、つながりが見える」【A】 「利用者が介護を必要とすることになった主な疾患・障がいの理解はできていた」【B】 「介護実習Ⅱと比べて介護実習Ⅲの方が疾患の理解が大事と強く思い、主な疾患を理解して介護過程を展開できた」【C】 「介護するに当たっては、主な疾患・障害を知らないとすごく怖いと実感している」【D】
4)主な疾患・障がいとADL(日常生活動作)との関連の理解	「主な疾患･障がいが分かると、この人にはこういうケアが必要と分かるようになった」【E】 「主な疾患・障がいと ADL（日常生活動作）との関連の理解ができると利用者理解が深まる」【F】	「情報の関連図を描いたら、主な疾患・障がいと ADL（日常活動作）との関連の一部因果関係が見えてきた」【A】 「主な疾患･障がいと ADL をつなげると、何が支援できるか思い浮かべることができた」【B】 「主な疾患・障がい、自分なりに見極め、ADL（日常生活動作）との関連の理解ができた」【C】 「こういう障がいがあるから、こういう生活動作になるということが分かった」【D】

5)利用者の思いの理解	「介護実習Ⅲでは、介護計画に利用者の思いを入れないといけないので、頑張ってコミュニケーションをとった」【E】 「介護実習Ⅲの受け持ち利用者さんは、疾患のせいで体が他の人より動かしづらいが、辛い感情を他者に見せない、その気持ちが伝わってきた」【F】	「情報の関連図を描く前より利用者の思いを理解できていた」【A】 「利用者の思いの理解は、項目に沿ったアセスメントではできない」【B】 「重症心身障害がある利用者さんの快・不快を分けて捉えるようにしたので、利用者の思いをおおむね理解できた」【C】 「介護実習Ⅲの受け持ち利用者は重症心身障害のため、本人の思いをことばで聞くことができなかったが、何を思っているのか、何が好きなのか、理解する姿勢が大切と思った」【D】
6)どのような人が利用者にどのように関わっているかの理解	「実習の最初の頃は、受け持ち利用者とどのように関わっていいか分からなかったので職員、他の利用者、家族との関わりを見ていた」【E】 「介護実習Ⅲの受け持ち利用者については、娘さんが面会に来られた様子を見て、利用者さんが少し明るくなった。家族ってすごいと思った」【F】	「どのような人が利用者にどのように関わっているかの視点で情報を収集していなかった」【A】 「どのような人が利用者にどのように関わっているかの理解はできていた」【B】 「受け持ち利用者が施設の中で関わっている人、家族の面会、数回様子を見させてもらったので、おおむねできていた」【C】 「受け持ち利用者は、施設の中だけだった、職員・家族の関わりを遠くから見させてもらった。受け持ち利用者が快の表情を見せる職員も分かった」【D】
7)生活歴が今の利用者の状況に関係していることの理解	「介護実習Ⅲの受け持ち利用者は、昔、外人と関わった経験があって、英語好きで、『これ英語でなんて言いましたっけ』と聞くと、生き生きとした反応をみせたのでかかわりのなかで英語を取り入れていこうと思った」【E】 「受け持ち利用者は、几帳面な方で、施設に入所してもその人の性格が表れていることを感じた」【F】	「生活歴が今の利用者の状況に関係していることにつては、介護実習Ⅲの振り返りで、情報の関連図を描いたが見えていなかった」【A】 「情報の関連図は、過去と現在のつながりが見える」【B】 　生活歴が今の利用者の状況に関係していることの理解では「受け持ち利用者は重症心身障害で脳性麻痺なため、ことばがなかったができていた」【C】【D】
8)介護の必要（課題）と介護内容までの予測	「全体像が捉えられたのでこういう介護ならいいかなと考えられ楽しかった。介護ニーズに一致した」【E】 「介護実習Ⅱでは実施までやったが介護実習Ⅲと比べると表面上だけしか見てなかったと思う。コミュニケーションを通して本当の気持ちが分かった【F】	「課題はすぐに捉えられた。今の資源に注目、周りの資源、環境、頭の中では知っていたが、今回のインタビュー尺度で思考は変化した」【A】 「情報の関連図を描いてからは、この辺でこうすればよいか、ぼんやり見えた。介護の必要（課題）をはっきりさせる一つの方法として使える」【B】 「介護の必要（課題）と介護内容まで予測は、一つひとつの情報をつなげることで分かってくる」【C】 「利用者の全体像が見えてくると何が必要か見えてくることを体験した。情報の関連図を描いた方が見えやすい」【D】

9)頭で考えるだけではわからないことの理解	「情報の関連図は頭で考えるだけでは分からないことが理解できるので、情報の関連図をどんどん描いていくこと必要である」【E】 「頭の中だけだと整理しにくいことが情報の関連図を描くとすぐに分かった」【F】	「利用者の環境、使えない資源、他理論と比較して思考が広がっていく。情報の関連図は今までの介護の常識を変えていく図である」【A】 「文章化する時に情報の関連図の中に文字があるので、これを頼りにつないでいき、文章化できる。利用者の性格や内面が見られる」【B】 「頭で考えるだけでは、わからないことの理解はおおむね出来た」【C】 「情報の関連図を描き出してみた方が、これは何だろうと、自分の分からないことが目で見て分かり、考えが浮かんでくる」【D】
10）線で結んだ情報の関連性について文章化することで、アセスメントの理解	「情報の関連図は自分なりに考えていくので、縛りがなく描きやすい。情報の関連図に情報が出ているのでアセスメントしやすかった」【E】 「情報の仲間のかたまりを自分でつくっているので、それを文章化し、アセスメントまとめやすかった」【F】	「情報の関連図を見ながら気づきを加え発言できる。文章でまとめることができる。アセスメントの理解を深めていける」【A】 「線で結んだ情報の関連性について文章化することで、アセスメントの理解ができた」【B】 「線で結んだ情報の関連性について文章化することで、アセスメントの理解はおおむねできた」【C】 「情報の関連図に情報があって、そこから知識が増えて根拠があるアセスメントが言える」【D】
11)その他、介護過程における「情報の関連図」について	「アセスメントをする上で情報の関連図はすごく必要、情報の整理、アセスメントしやすい」、「介護実習Ⅲの配属先の実習指導者さんが、情報の関連図を描いたのを見てほめてくれた」、「介護実習Ⅲは利用者理解が早く、内容も深い、介護実習Ⅱは浅かった。介護実習Ⅱも情報の関連図を書いていたら充実した実習だったと思う」【E】 「介護実習で情報の関連図を描いた方がよい。情報の関連図は自由だから描き方が分からなかったが、とりあえず描き始めるとボンボン出てくる。出てこなければ、そこの部分の情報収集をしていけば分かる」、「様式『ICFに基づいたアセスメントシート』を埋める前に情報の関連図を描く、指定のA4用紙の中央に「利用者」を描くことは決まっているので、情報がボンボン出てきたら楽しい。描きながら、そういえばあれもあったと情報の関連図を描くことで利用者の心身の状態が見えてきた」【F】	「「情報の関連図を個別スーパービジョンに活用できる」、「実習指導者に情報の関連図の有効性を伝える必要がある」、「現場の介護職が情報の関連図だけでも使える」、「情報の関連図は、型がないので、ストレングス視点から介護過程の展開ができる」、「介護福祉士の個別性を引き出すモデルではないか」、「情報の関連図は根拠のかたまりである」、「情報の関連図を用いることで『なぜ』を深めていく思考が育ってきたように思う」【A】 「情報の関連図を描くと、意外とこれだけの情報を自分はもっていたことが分かり、ポジティブになれる」、「情報と情報の関係性が視覚的にも、頭の中で整理するにも有効である」、「ICFに基づいたアセスメント表より、最初から関連図を描いて、拾う方がもしかしたら書きやすいかも知れない」【B】 「情報の関連図を描くことで、利用者理解ができ、個別支援計画のニーズが明白になる」【C】 「はじめに情報の関連図を描きながら、調べながら情報収集し、指定の記録様式に転記し、整理していたら早かったと思う」、「実習後に情報の関連図を描いたら、介護実習中の介護計画とは違う介護計画が立案でき、こうした方がよかったと自分で気づけた」【D】

【　】内のアルファベットは、調査対象者を示す。　（筆者作成）

Ⅳ．考察

聞き取り調査の対象者は、４年制大学介護系学生の６名である。その内、「介護実習Ⅲ」で「情報の関連図」を描いたのは、学生Ｅ・Ｆの２名だった。これは情報の関連図の様式が介護実習記録に組み込まれず、任意だったことと、「記録様式６種類と実習日誌等の記録だけでも大変だった」ことが原因であった。「介護実習Ⅲ」で情報の関連図を描いた学生Ｅ・Ｆの２名も最初の取りかかりに抵抗があったことからも分かる。

１．情報の関連図を活用していない「介護実習Ⅱ」と活用した「介護実習Ⅲ」の比較

学生Ｅは、「アセスメントをする上で情報の関連図はすごく必要、情報の整理、アセスメントしやすい」と述べていた。このことは（横尾[12]の「生活関連図の作成は容易にできるが、諸問題の関連性を統合し、分類、整理することや説明として書き表すことが困難であった」の課題を解決するのに情報の関連図が有効ということが分かる。

学生Ｅは、「受け持ち利用者さんだと責任があるので主な疾患・障害をよく、深く知った。実習が終わったあとにも分からないことをちゃんと調べてよかった、充実していた」と述べていた。また、学生Ｆは「介護実習Ⅱでは実施までやったが介護実習Ⅲと比べると表面上だけしか見てなかったと思う。介護実習Ⅱでは、受け持ち利用者の病気を調べようとしなかった。情報の関連図を描いたことで主な病気を知るきっかけになった。病気を知ることで受け持ち利用者との接し方が変わった」と述べており、両者とも情報の関連図を活用していない「介護実習Ⅱ」と活用した「介護実習Ⅲ」を比較して、「介護実習Ⅲ」の方が深い実習ができており、受け持ち利用者が介護を必要とすることになった主な疾患・障害を知り、利用者の全体像を捉えた介護過程の展開を体験していた。

２．介護実習Ⅲで、情報の関連図を書いた意義

学生Ｅは、「今まで情報の関連図を重要とは思っていなかったが、情報の関連図を描き、情報の関連の理解が介護実習Ⅱよりもできた。介護過程の授業に情報の関連図があった方がよい。介護現場で情報の関連図を描いてみると分かりやすい。描いてみないと分からない」と述べていた。学生Ｆは、「情報の関連図は描き方に縛りがないから、自分なりに描けるところがいいなと思う。自分が考えていることをそのまま描けるが、決まりがないはないで、どこまで描けばいいのだろうと思う。自由ならいいや自分の好きなところでと、描きはじめると考えられるだけ考え、自分の知っている情報は絞り出せた。頭の中だけだとこんがらかってくる。描きだせば目で見えるので分かりやすい。描いていくなかで、これもあったかなと思い出すこともあった」このことから、５つの意義と「介護過程の授業に情報の関連図があった方がいい」という提案があったが情報の関連図は現場で一度実施を体験しないと情報の関連図の有効性は伝わりにくいことが分かった。

学生Ｆは、「実習の最初の頃は、受け持ち利用者が疾患を抱えているが自分で何をしたらいいか分からなかったが情報の関連図を描き、コミュニケーションを通して本当の気持ちが分かった」と述べており情報の関連図は、利用者との関係性を深めるのに有効ということが分かる。

３．介護実習の事後で情報の関連図を描くこと

学生Ｂは、「ケーススタディも情報の関連図

から広く捉え、拾えた。利用者理解は深まっていった」と述べており、実習後に情報の関連図を描くことは、受け持ち利用者の全体像が捉えられ、ケーススタディの準備として役立つことが分かった。また、介護実習後に情報の関連図を描いて、学生Ｄは、「介護実習Ⅲと比べ介護実習Ⅱの方が情報の関連図（蜘蛛の巣）が小さかった」と述べており、情報の関連図は、視覚的に情報量の確認できるということである。また、学生Ｄは、「はじめに情報の関連図を描きながら、調べながら情報収集し、指定の記録様式に転記し、整理していたら早かったと思う。実習日誌の下のスペースに分からないことをメモし、実習後に情報の関連図を描いたら、介護実習中の介護計画とは違う介護計画が立案でき、こうした方がよかったと自分で気づけた」と述べており、情報の関連図の活用法まで提案し、再アセスメントして介護計画を修正できていることから、介護実習後に情報の関連図を描くことは、介護過程の展開能力の向上に有効であるといえる。そして、学生Ｄは、「実習中に情報の関連図を描いていれば、早い段階で情報をつなげられ、生活の難しさがあることからこんな計画が必要ということが見え、支援計画に反映できた」と述べていた。これは、横尾[13]の、介護過程における生活関連図学習の今後の課題として、①生活関連図によるアセスメント内容を介護計画に反映させることの解決になることが分かる。

４．介護過程の展開における情報の関連図

学生Ｂは、「文章化する時に情報の関連図の中に情報があるので、これを頼りにつないでいき、文章化できる。描くまでが大変と思うが、描きだしたら止まらない。描いてしまえば早い、自分らしさめちゃくちゃ出る。介護者の性格や内面が見られる」と述べていた。情報の関連図には、情報が書かれるので、その文言を手掛かりに、アセスメントを文章化しやすいということが分かった。この体験は杉山[14]の情報の関連図のねらいと一致していた。

学生Ｆは、「様式『ICF に基づいたアセスメントシート』を埋める前に情報の関連図を描き、指定のＡ４用紙の中央に利用者を描くことは決まっているので、情報がボンボン出てきたら楽しい。書きながら、そういえばあれもあったと情報の関連図を描くことで利用者の心身の状態が見えてきた」と述べていた。これは、ICF に基づいた介護過程の展開」における情報の関連図の活用法である。A4 の中央に利用者を描くのは、真っ白なこころで、利用者を中心、利用者本位（自立支援）を意味している。学生Ｆはそれを体験したといえる。

学生Ａは、「情報の関連図を個別スーパービジョンに活用できる。実習指導者に情報に関連図の有効性を伝える必要がある」と述べていた。また、学生Ｅは、「介護実習Ⅲの配属先の実習指導者さんが、情報の関連図を描いたのを見てほめてくれた」述べていた。このことから、実習指導者の中に、既に介護過程の展開における情報の関連図の有効性に気づいている人がいるということで、多くの実習指導者に情報の関連図を伝える必要性が示唆された。

学生Ａは、「ICF（国際生活機能分類）に基づいた介護過程では、ストリングスを感じていなかった。情報の関連図は、型がないので、ストレングス視点から介護過程の展開ができる。情報の関連図は色々な可能性のある図であり、介護福祉士にはこういう教育が必要である。情報の関連図は根拠のかたまりである。情報の関連図を描く人に根拠がないことが目に見える。情報の関連図は介護職の個性を引き出すモデル

ではないか」と述べていた。このことから介護過程における情報の関連図は、ストレングス視点の関連図ということが分かる。

ストレングス視点は、「人は、潜在的に『強さ（ストレングス）』を持っているが、さまざまな理由でその『強さ』を発揮することができないと考える視点のこと」、「その『強さを』を活用することによって、自分自身の生活感覚に基づき自分で考え、決定する『自己決定』ができると考える。支援をする専門職は『強さ』に注目し、その『強さ』が活用できるようにする」[15]情報の関連図はストレングス視点の介護過程の展開を可能にする。

「介護過程の展開における関連図は、表示方法に用語や記号の定義を行わない情報の関連図が有効である。」

介護過程における『情報の関連図』は、（ストレングス視点の関連図である。

専門性を形にする介護過程の展開に「情報の関連図」を取り入れることが介護福祉士の独自性・専門性の確立に大きな力になるであろう。

Ⅴ．おわりに

本稿では、聞き取り調査の結果を集約し、情報の関連図を活用していない「介護実習Ⅱ」と活用した「介護実習Ⅲ」の比較や事後指導としての活用から「情報の関連図」の有効性を考察した。結果、以下の12項目が示唆された。

①利用者の全体像把握の自己評価基準（インタビューガイド）は、最も高いのが37点で学生6名全員が31～37点のB評価以上であったことから、6名の介護系学生は、利用者の全体像把握がおおむね出来ていた。

②「介護実習Ⅲ」で「情報の関連図」を描いた介護系学生2名は、情報の関連の理解を深め、利用者の全体像を捉えた介護過程の展開を体験していた。

③「情報の関連図」は、利用者との関係性を構築するのに有効である。

④介護過程の展開に「情報の関連図」があったほうがよい。

⑤「情報の関連図」には、情報がそのまま書かれるので、それを手掛かりに、アセスメントを文章化しやすい。

⑥「情報の関連図」は視覚的に情報量を確認できる。

⑦情報の関連図は、ICFに基づく介護過程に、活用できる。

⑧ICFに基づく介護過程の様式は量が多く負担になっている。

⑨「情報の関連図」は、ケーススタディにも役立つ。

⑩「情報の関連図」は、介護過程を展開する介護実習のスーパービジョンに活用できる。

⑪「情報の関連図」は、横尾の「生活関連図の作成は容易にできるが、諸問題の関連性を統合し、分類、整理することや説明として書き表すことが困難であった」ことと「介護過程における生活関連図学習の今後の課題として、①生活関連図によるアセスメント内容を介護計画に反映させること」を容易にする。

⑫介護過程における「情報の関連図」は、ストレングス視点の「情報の関連図」である。

以上のことから、介護過程における情報の関連図に対し、介護系学生6名がすべて肯定的な発言であったことから情報の関連図は、介護過程の展開における利用者の全体像把握に有効であるといえる。

しかし、今回、「介護実習Ⅲ」で、情報の関連図を描いたのは2名と少数であり、調査対象

としては代表性に欠ける。また、現在使用の介護実習記録様式に任意の追加は学生にとって、記録の量的にも気持ち的にも余裕がなく難しかった。また、情報の関連図の有効性は、現場で一度、実施しないと伝わりにくいことも分かった。

今後の課題としては、実習指導者を対象とした情報の関連図の研修や、実習記録様式に情報の関連図を組み入れた研究を行い、介護過程における「情報の関連図」を介護福祉教育方法や介護福祉士独自のスキルとして一般化していきたい。

謝辞：聞き取り調査にあたって、3年次生の6名の学生さんには、筆者の研究室に出向いて、貴重な時間をさいていただけたこと、心から感謝申し上げたい。なによりも、6名の学生さんから、情報の関連図について、体験から学び得た貴重な意見を聞くことができ、本稿をかたちにできたこと、うれしく思います。

【引用文献】

1）太田貞治：「認定介護福祉士」（仮称）創設と介護福祉士養成教育の今後，介護福祉教育，18（２），2013.
2）佐藤富士子：アセスメント，新・介護福祉士養成講座9介護過程，中央法規出版，p.33，2009.
3）横尾成美：生活関連図を用いた介護過程の理解度と考察―試験評価と実習後の自己評価―，東北文教大学・東北文教大学短期大学紀要，（２），pp.169-187，2012.
4）前掲書3)，pp.186-187.
5）前掲書3)，pp.169-170.
6）伊藤希久美：「介護過程」授業展開に関する一考察―利用者理解を深める関連図の活用について―，信州短期大学紀要，22，p. 47，2010.
7）杉山せつ子：「介護過程の展開における「情報の関連図」の教育的効果に関する研究―全体像の把握に焦点をあてて―」，聖隷クリストファー大学紀要（12），pp.11-28，2014.
8）吉田節子：第1章，第1節介護過程とは，新・介護福祉士養成講座9介護過程第2版，p. 2，2011.
9）同掲書8)，p. 3，2011.
10）横尾成美他：生活関連図を用いた介護過程の取り組み―生活関連図の理解度―山形短期大学教育研究，（9），pp. 63-68，2009.
11）介護福祉士養成講座編集委員会：新・介護福祉士養成講座9介護過程第2版，2011.
12）前掲書5)，pp. 45-47.
13）前掲書6)，pp.184-185.
14）前掲書10)，pp. 11-28.
15）長崎和則：『社会福祉用語辞典』第4版，ミネルヴァ書房，p. 209，2004.

【参考文献】

1）伊藤希久美：「介護過程」授業展開に関する一考察―利用者理解を深める関連図の活用について―，信州短期大学紀要，22，pp. 45-48，2010.
2）杉山せつ子：介護記録，介護福祉士選書18介護実習指導，pp. 78-104，建帛社，1989.
3）杉山せつ子：介護過程，介護福祉士選書15介護技術，pp. 51-67，建帛社，1990.
4）杉山せつ子：介護診断－介護過程の確立を目指した－，介護福祉教育，6，pp. 22-25，1990.
5）杉山せつ子：介護福祉士が行う介護とは，介護福祉士選書14介護福祉概論，pp. 4-5，建帛社，2000.

6）杉山せつ子：介護過程を中心に位置づけた介護福祉教育について，平成15年度社会福祉法人日本介護福祉士養成施設協会全国教員研修会報告書，pp. 129-140，2004.
7）杉山せつ子：「介護福祉ニーズに視点をおいた介護過程」の展開―介護過程の確立を目指して―，聖隷クリストファー大学大学院社会福祉学研究科修士論文，2007.
8）杉山せつ子：聖隷学園における介護福祉教育と介護過程研究の変遷―介護過程の展開ツールの作成に至るまで―，聖隷クリストファー大学紀要（6），pp. 37-51，2008.
9）杉山せつ子：介護過程の展開ツール「介護福祉ニーズに視点をおいた介護過程―利用者本位の介護を目指して―」，社会福祉学研究「創刊号」，pp.37-53，2008.
10）杉山せつ子：介護福祉の概念に関する研究―介護過程に焦点をあてて―，聖隷クリストファー大学紀要（11），pp. 65-77，2013.
11）杉山せつ子：介護過程の展開における「情報の関連図」の教育的効果に関する研究―全体像の把握に焦点をあてて―，聖隷クリストファー大学紀要（12），pp. 11-28，2014.
12）杉山せつ子：介護福祉ニーズに視点をおいた介護過程（介護過程の展開ツール）の研修効果その１―A県またはB県において研修時ファシリテーターの介護福祉士を対象とした実証研究―，聖隷クリストファー大学紀要（13），pp. 48-63，2015.
13）中澤秀一：介護福祉士の魅力を探る―専門実践過程でえられるもの―，介護福祉教育，20（２）pp. 53-64，2015.
14）野原かおり他：ICFの考え方に基づいた介護過程展開」における学生の視点の変化，介護福祉教育，20（２）pp. 65-71，2015.
15）横尾成美他：生活関連図を用いた介護過程の取り組み―生活関連図の理解度―山形短期大学教育研究，（9），pp. 63-68，2009.
16）横尾成美：生活関連図を用いた介護過程の理解度と考察―試験評価と実習後の自己評価―，東北文教大学・東北文教大学短期大学紀要，（２），pp.169-187，2012.

資料１　　実施日：

介護過程の展開における「情報の関連図」の効果につての調査

＊半構造化面接、選択肢のある回答の設定は評価尺度法

この聞き取り調査は、介護過程の展開における利用者の全体像を捉えるということに着目した「情報の関連図」の効果測定です。この調査結果は、研究以外の目的には利用いたしません。また、あなたの個人名が出ること、不利益やご迷惑が生じるようなことはありませんので率直なご意見をお話ください。選択肢があるものについては、該当する番号をお答えください。

聖隷クリストファー大学社会福祉学部　杉山せつ子
連絡先：TEL．053-439-3182（直通）

１．あなた御自身についてお聞きします。

１）性別　１．男性　２．女性
２）年代　１．10 代　２．20 代　3．30 代　4．40 代　５．50 代　６．60 代
３）学年（　　）

２．介護過程の展開における「情報の関連図」を使用して、利用者の全体像の把握について伺います。

１）自分でまとめることで利用者の理解を深めることができましたか。

①出来ている　②おおむね出来ている　③ほとんど出来ていない　④出来ていない

【記載欄】

２）情報の関連の理解を深めることができましたか。

①出来ている　②おおむね出来ている　③ほとんど出来ていない　④出来ていない

【記載欄】

３）利用者が介護を必要とすることになった主な疾患・障がいにつて理解できましたか。

①　出来ている　②おおむね出来ている　③ほとんど出来ていない　④出来ていない

【記載欄】

4）主な疾患・障がいと ADL（日常生活動作）との関連が理解できまいたか。

① 出来ている　②おおむね出来ている　③ほとんど出来ていない　④出来ていない

【記載欄】

5）利用者の思いが理解できましたか。

① 出来ている　②おおむね出来ている　③ほとんど出来ていない　④出来ていない

【記載欄】

6）どのような人が利用者にどのように関わっているか理解できましたか。

①　出来ている　②おおむね出来ている　③ほとんど出来ていない　④出来ていない

【記載欄】

7）生活歴が今の利用者の状況に関係していることの理解ができましたか。

① 出来ている　②おおむね出来ている　③ほとんど出来ていない　④出来ていない

【記載欄】

８）介護の必要（課題）と介護内容まで予測できましたか。

①　出来ている　②おおむね出来ている　③ほとんど出来ていない　④出来ていない

【記載欄】

９）頭で考えるだけだはわからないことが理解できましたか。

① 出来ている　②おおむね出来ている　③ほとんど出来ていない　④出来ていない

【記載欄】

10）線で結んだ情報の関連性について文章化することで、アセスメントの理解を深めることができましたか。

① 出来ている　②おおむね出来ている　③ほとんど出来ていない　④出来ていない

【記載欄】

その他、お気づきの点がございましたら自由にお話しください。

ご協力ありがとうございました。